

F 1 児童の裁縫ミシンによる縫製作業について—電動ミシンによる直線縫い—
京都教育大 ○増田久子
帝国女子大 清水 歌

目的 家庭科教育の近代化と学習指導の能率化とをはかるために、小学校の家庭科では電動ミシンを教具とすることが望ましいのではないかと考え、その適否を検討する目的で、前回は電動ミシンと足踏みミシンを使用して、児童に糸をかけないで直線縫いを行わせ、その実態と作品の観点から比較検討した。その結果、電動ミシンを教具とすることは、児童のミシン使用能力の観点から適切であることがわかった。今回はこれをふまえて、電動ミシンによる学習指導上の問題点を探索し、実践教育の場に役立てるために、児童に糸をつけて作業を行わせ、前回と同一観点から分析し、性別・経験の有無別に比較検討した。

方法 調査対象は京都教育大学附属小学校の4年生男女総数116名、調査時期は昭和55年9月、作業は、白色キャラコ(35×45cm)を2つ折りにし、25cmの直線を3本引いたものを用い、ミシン針は11番、糸は黒木綿ミシン糸50番、針目は3mmとして、児童に直線縫いを行わせた。

結果 作業状態については、コントローラのふみ方では、縫い始め・縫い終りに調整できる者はそれぞれ30%以下である。布の押え方では、普通の押え方をした者が約53%である。作品については、縫い線の縦・横ともに逸脱のない者は約9%、縦のみ逸脱した者は約27%、横のみ逸脱した者は約9%、縦・横ともに逸脱した者は約55%である。横の逸脱幅は5mm以下の者が多く約89%である。針目は、標準針目よりも細かい者が約52%で、布の押え方と関係があると思われる。なお、ほとんどの項目について男女差は認められなかった。